対談

全ての教育活動を キャリア教育を意識したものとするために

キャリア教育の本来の目的は、あらゆる教育活動を通して社会で必要な力を身に付けることにある。キャリア教育の真のねらいとは何か、受験指導との両立は可能か、今ある教育活動をどのように見直していけばよいのか。筑波大の藤田晃之教授と東京都府中市立府中第三中学校の谷合しのぶ校長に語っていただいた。

職場体験が前年度踏襲の恒例行事となっていないか

――最初に、文部科学省が目指しているキャリア教育の方向性を教えてください。

藤田　柱は2つあります。1つは、教科指導を含めた全ての教育活動でキャリア教育を実践すること、もう1つは体験活動の更なる充実です。これらの教育・体験活動を通して、基礎的・汎用的能力を養うことが最大のねらいです。その背景には、子どもの学ぶ意欲の低下があります。「なぜ勉強するのか分からない」「勉強が将来にどうつながるのか分からない」という思いに対して、キャリア教育を通して学習意欲の向上、学習習慣の確立を図ることが期待されています。

谷合　これからの時代、将来を楽観することは出来ません。自分の力で道を切り開いていかなければならないことを、生徒は知っています。自分の良さや能力を理解し、目標や夢を見つけられるように、全ての教育活動を通して生徒に働き掛けることが重要です。そのことを、国や自治体は学校現場にきちんと伝えてきたのでしょうか。2年生を中心として行われる職場体験が始まった時、「望ましい勤労観・職業観の形成」という言葉が出たために、多くの先生方が「職場体験がキャリア教育そのものである」と捉えました。基礎学力の定着と、主体的に学ぶ態度の育成を目指したキャリア教育の定義が、学校現場に浸透していないことが最大の課題だと思います。

藤田　職場体験は恒例行事化している学校が多いと思います。例年通りに手続きをし、当日を迎え、事故なく終わって良かったと、つつがなく終了すること自体が目的になっているように見える学校があることは残念ですね。

谷合　生徒は職場体験で初めて社会に接し、多くのことを学びます。それが、生徒にとってのキャリア教育のスタートです。職場体験で得た気付きや失敗から自分に足りないものを知り、どのようにして克服すればよいのかを考えることが、職場体験を生きた取り組みにするポイントだと思います。本校では今年の職場体験で、受け入れ先の事業所から厳しいお叱りを受けました。あれだけ準備をして自信を持って送り出した生徒が、職場で友だちに流されて規律を軽んじる行動をしました。生徒に責任の重さを感じさせるために、

社会を生きる力を育む――キャリア教育の視点で教育活動を捉え直す

筑波大人間系教授
藤田晃之
ふじた・てるゆき◎筑波大大学院博士課程教育学研究科単位取得退学。博士（教育学）。専門は教育制度学、進路指導、キャリア教育。中央学院大商学部助教授、筑波大大学院准教授、国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター総括研究官等を経て、2013年から現職。

東京都府中市立府中第三中学校校長
谷合しのぶ
たにあい・しのぶ◎教職歴32年。同校に赴任して4年目。東京都の公立学校教諭、東京都教育委員会、瑞穂町教育委員会学校指導課長などを経て現職。府中市立府中第三中学校◎「自他の敬愛」を校訓とし、3年間を見通した教育活動を推進。学力向上やキャリア教育に力を入れている。生徒数613人。

教師の引率の下、事業所に謝りに行かせました。仕事は責任が伴うものであることに気付く良い機会になったと思います。

「誰かのためになることをする」のが仕事の本質

――「2011年度にアメリカの小学校に入学した子どもたちの65％は、大学卒業時に今は存在していない職業に就くだろう」という予測（＊）があります。不確実で予測できない未来を生き抜く力を育むために、中学校のキャリア教育が果たすべき役割はどのようなものだとお考えですか。

藤田　文部科学省は、発達の段階ごとにキャリア教育のねらいを定めています。小学校は進路の探索・選択にかかる基盤形成、中学校は現実的探索と暫定的選択、高校は現実的探索・試行と社会的移行準備です。中学校段階ではあくまで「暫定的」な選択であることが、高校と異なります。職業体験でいうと、高校のインターンシップは、ある程度、自分が進みたい方向性を想定して職場を選びますが、中学校では自分がその職業に就くか就かないかは脇に置いて考えられます。仕事内容よりも、働くとはどういうことなのか、仕事の本質を学ぶことが中心になるわけです。

これからも社会では次々と新しい仕事が生まれ、消えていくでしょう。このように職業の新陳代謝が激しいのは、商品やサービスの受け手のニーズに合わせて細かく応えようとする人がいるからだと思います。つまり、「誰かのためになることをする」のが仕事の本質であり、変化が激しい時代だからこそ、このような本質の部分を子どもに伝えていかなければならないと思います。

よく「やりたいことが分からない」「就きたい職業がない」という若者がいます。それは、「自分中心」で仕事を考えているからではないでしょうか。そうではなく、自分が働くことによって笑顔になってほしいのは、子どもか、高齢者か、けがをしている人か、忙しくて困っている人か……。「誰の笑顔を見たいのか」を考えさせると、違った答えが出てくるかもしれません。

谷合　本校では、1・2年生の夏休みに「キャリア面接」を行います。1年生は副校長が、2年生は校長の私が、生徒全員とグループ面接を行い、将来の夢や頑張っていることなどを聞きます。私は生徒に「どういう生き方がしたいか」「どんな大人になりたいか」と尋ねるのですが、生徒の7割は具体的な職業名を答え、残りの3割は一様に「人の役に立つ仕事がしたい」と言います。「人のために生きたい」「人の役に立ちたい」という思いを育むことが、中学校におけるキャリア教育のゴールの1つだと思うのです。

もう1つ、私たちが日々生徒に伝えているのは、感謝する気持ちの大切さです。相手に

＊アメリカ・デューク大の研究者キャシー・デビッドソン氏が2011年8月、「ニューヨークタイムズ」で語った予測

感謝したり、感謝されたりすることによって、自己有用感が高まり、集団や社会の中での生きがいややりがい、自分はここに生きて存在しているという実感を持てるのだと思います。考え方や育ち方の違う生徒が一緒に生活する中で、時に仲間と認め合い、集団としておかしいと思うことは正していく。異質な集団の中で課題解決する経験を積むことが、どのような状況に置かれても、自分で将来を切り開いていく力になるのではないでしょうか。

藤田　谷合先生のおっしゃる通り、自己実現は他者との関係の中でのみ出来ることだと思います。そういう意味では、多様な背景や学力を持つ生徒が集まる公立中学校は、根源的な議論が出来る最良の場所ではないでしょうか。人とのかかわりの中で自信が持てたり、逆に自分の小ささを実感したり、あるいは自分と全く違う見方を教えられたりする。そうした体験を通して、他者を認め合う心を育むことが、グローバル時代に必要な、異質な他者と協同する力にも発展するのだと思います。

高校入試に向けた学習をキャリア教育に位置付ける

――一方、中学校としては進学先を保障するという視点も忘れてはならないと思います。進学先の保障とキャリア教育はどのようにバランスを取ればよいのでしょうか。

藤田　かつての進路指導が「出口指導」と呼ばれ批判されたのは、高校入試に合格することがゴールになっていたからだと思います。進学先が決まったらそれで終わりではなく、それを1つのステップとして将来を見つめ直す必要があると思います。例えば、多くの中学校では3年生までに「10年後の私」といった作文を書きます。それを読み返しながら、「君は高校進学というステップはクリアしたね。中学校での経験を生かしてどのように高校生活を過ごすつもりかな。高校卒業後はどうするの?」というように語り掛け、生徒に5年後、10年後の自分を展望させるのです。

谷合　本校では、1年生から高校の入試要項と本校の推薦基準を提示して、進路を意識させるようにしています。推薦基準を通して、1年生から学校生活について自分の目標をきちんと定めることが、進路や自立への1つの道筋にもなるからです。学習や部活動、委員会活動など学校生活の全てを前向きに取り組むことは、自分だけでなく、互いの向上につながります。そのことが社会を生きていく上でも必要な力になると、理解してほしいと考えています。

藤田　高校入試に向けた学習も、キャリア教育として位置付けることが出来ます。合格のために苦手教科に向き合ったり、学習計画を立てて実行し、成績が思わしくなければ軌道修正したりすることは、社会で仕事をする時にも必要になる力です。先生方がそれらをきちんと捉えて、「頑張っているな」「今、やっていることは将来きっと役に立つよ」と伝えることで、子どもは受験の意義を捉え直すことが出来るのではないでしょうか。

　また、高校入試が近付くと、入試の頻出問題を扱うと思いますが、これは高校進学後や社会で必要な知識だからこそ入試でも必ず問われるのです。「入試で絶対に出るぞ」だけで終わらせず、「高校に入ったらこんな内容に発展する」「社会ではこのような場面で使われている」というように、なぜその内容が出題されるのか、どのように将来につながっ

社会を生きる力を育む——キャリア教育の視点で教育活動を捉え直す

ていくのかを意識させれば、生徒も前向きに受験勉強に取り組むのではないでしょうか。

「教師も社会人」という意識を持つことでキャリア教育は充実する

——あらゆる教育活動を通してのキャリア教育を実現するために、学校現場や先生方にはどのような心構えが必要でしょうか。

谷合　教師自身が社会人として自分を磨く意欲を常に持ち続けることが、大切ではないでしょうか。本校では、2年生の職場体験で、2年生の先生方だけではなく、1年生、3年生の先生方とも分担して、受け入れ先の事業所にあいさつに行きます。職場体験を学校全体の取り組みにすると共に、先生方に生徒が将来働くであろう社会を身近に感じ、視野を広げてほしいからです。学校の外での体験を重ねていただきたいと思っています。

藤田　先生自身が、等身大の社会人としての自分をサンプルとして開示することもよいと思います。教師になった理由、仕事の喜びや大変さなどを、生徒に話す機会を設けてみてはどうでしょうか。そうすることで、「自分が話しきれなかったことは、PTAの方や社会人講話などで外部の人に話してもらおう」というように、先生方の意識も外に向かっていくのだと思います。

谷合　管理職がリーダーシップを取り、キャリア教育の全体像を具体的に示すことも大切だと考えます（図）。キャリア教育で育てたい生徒像、卒業までに身に付けさせたい力、学校全体の中でのキャリア教育の位置付けなどを明確にする。それによって、先生方は自分たちが今どこにいて、どの方向に進んでいるのかが分かり、足並みをそろえて指導できるようになるはずです。また、取り組みのねらいを一つひとつ明示することで、本当に生徒にその力が付いたのかどうかを評価しながら指導できます。そうしたことは負担になるかもしれませんが、取り組みを一からつくり直すわけではありません。これまで行ってきたことをキャリア教育の視点で整理するだけで十分可能です。キャリア教育は特別なものではなく、これまでずっと中学校で指導してきたものであることを、先生方に気付いていただきたいと思っています。

図　府中市立府中第三中学校「平成26年度 キャリア教育 全体計画」

キャリア教育の全体目標

社会性の確立と自立心の育成・よりよく生きる力の形成

キャリア教育で身に付けさせたい力

人間関係形成・社会形成能力	自己理解・自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング能力
自他の理解能力・コミュニケーション能力 多様な他者の考え方の理解、相手の意見を聞き自分の意見を正確に伝える、自分の立場や状況を受け止め役割を果たす、他者との協力、社会を形成する力	**自己理解能力・自己管理能力** 社会との相関関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動する、思考や感情を律しつつ今後に向け進んで学ぼうとする力	**計画実行力・課題解決能力** さまざまな課題を発見・分析し適切な計画を立ててその課題を処理し、解決する力	**情報収集・探索能力、職業理解力、役割把握・認識能力、計画実行力、選択能力、課題解決能力** 「働くこと」の意義を理解し、自らが果たすべきさまざまな立場や役割との関連を踏まえて主体的にキャリア形成する力

学校教育目標を実現するため、全体計画では、4つの能力を育成するための具体的な手立てとして、学年ごとに「日常生活」「各教科」「道徳」など6つの場面に分け、それぞれにすべきことを明示している

＊府中第三中学校の資料から抜粋して編集部で作成。全体はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトからダウンロードできます
http://berd.benesse.jp →HOME＞教育情報＞中学校向け

藤田　今ある教育活動をキャリア教育の視点で捉え直すことは、非常に重要です。例えば、人間関係形成能力を高めるにはどうすればよいのかを考える時、キャリア教育の視点から学校の取り組みを見ると、体育や音楽の授業、学び合い活動、学校行事など、日常のさまざまな活動がキャリア教育の重要な機会でもあることに気付くでしょう。教師がそれを意識するだけで、生徒に掛ける言葉が異なり、生徒の成長の捉え方も自ずと変わっていくと思うのです。「学び合いでAさんをフォローしていたね。Aさんはとてもうれしかったと思うよ」などの声掛けが生徒の自己肯定感を高め、キャリア形成につながるのです。既に行っている教育実践の価値を再認識するためにも、今ある活動をキャリア教育として捉え直す視点を持つことが大切だと思います。

——本日はありがとうございました。